

緒言

ここ数年、その年の社会情勢について述べてきた。2年前の2022年2月、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、現在もまだ続いている。また、新型コロナは、5類に移行するなど落ち着いてきたものの、依然終息したわけではない。そうしたなか、昨年にはイスラエル軍のパレスチナ・ガザ地区への攻撃が始まり、多数の難民が出て飢餓状態がおこっている。そして今年の元旦には、「能登半島地震」が発生し、建造物の倒壊のため、あるいは津波のため、尊い命が多数失われた。数年前、日本史実習の授業で学生を引率して石川県を訪ねたことがあり、七尾城にも登ったので、自然災害のもたらした惨状をニュース映像として見るたびに心が痛む。

実習で初めて見る金沢は、「洗練された町」という印象だった。「雅」（みやび）な雰囲気^{きよけい}が各所に見られ、応仁・文明の乱など都で戦が起こった際、公家たちが多く避難したことで京都の文化の北陸地方への伝播に影響したと言うのも頷ける。自然災害や戦乱によって貴重な文献資料（古文書・古記録）が失われるが、それを守り、後世に伝えるのも人間の行為である。

日本史の基礎史料群の一つである「東寺百合文書」は有名な古文書群だが、今日まで伝来したのは、北陸の加賀藩主前田綱紀の優れた見識によるところが大きい。それは、京都の東寺に伝えられた日本中世の古文書で、かつては京都府立総合資料館が所蔵していたが、現在は京都府立京都学・歴史館が所蔵する約2万五千点（主に14世紀から16世紀、南北朝～戦国時代）であり、平成9年（1997）に「国宝」に指定された。

江戸時代、外様大名として知られる加賀藩の藩主で金沢城主の前田家は、初代が前田利家（加賀藩始祖）で、尾張に生まれ織田信長に近侍し、柴田勝家の配下として、佐々成政・不破光治とともに（越前）府中三人衆として活躍した。その後、賤ヶ岳^{しずがけ}の戦いで羽柴秀吉に敗北した柴田勝家が亡くなった後、加賀金沢城主となった。

秀吉とは同じ信長の家臣として仕えた同僚であり、秀吉の正室北政所^{きたのまんどころ}と利家の正室芳春院は幼馴染でもある。秀吉の信頼が厚く、秀吉の子秀頼のもり役をつとめた。秀吉が亡くなった慶長3年、まだ幼い秀頼の後見人として秀頼と大坂城に入ったが、翌慶長4年に大坂城内で亡くなり、その後、政局が急速に緊迫化して関ヶ原の戦いとなった。

先に述べた前田綱紀（1643～1724）はこの加賀藩第五代藩主であり、3歳で家督を継ぎ、その治世は79年にも及んだ（享年82歳）。さまざまな政策を実施したが、特に学術の分野では「書物奉行」を設け、古今の書を広く収集したほか、古文書の整理をおこない、さらに家臣を日本各地に派遣して書物を求めた。綱紀は、東寺からも古文書を借用し、目録作成や文書を書写したのち、貞享2年（1685）に文書整理を終えて返却する際、膨大な数の古文書保存のために桐箱100個を東寺に寄附したため、その後、古文書群は、この桐箱に納められた形で現在まで伝来することになった。「東寺百合（ひゃくごう）文書」の名称は、こうした経緯による。

古文書・古記録は、人の営みを物語る証人であり、研究者はその価値を理解できるよう研鑽を積むことが求められている。

2024年3月15日

広島大学文学部附属内海文化研究施設
施設長 本多博之

目 次

緒 言

宮崎県日南市榎原神社所蔵文書・書画・器物類目録稿

……………妹尾 好信・長友 禎治・北原沙友里………… 1

〈翻印〉推定・永代美知代作「老嬢の告白」(1)……………有 元 伸 子………… (47)

廿日市市指定重要文化財「糸賀家文書」の紹介……………水 野 椋 太………… (21)

地域社会の変容と交通機能

－荒山駅家から「世能宿」への始動－……………西別府 元 日………… (1)

() は縦組で裏表紙から

広島大学文学部附属内海文化研究施設研究紀要投稿・執筆要項

広島大学文学部附属内海文化研究施設細則

広島大学文学部附属内海文化研究施設運営委員および研究員 (令和5年度)